

# COSMOS集



鈴木 竹志選

「あすなる集」特選

母ひとり子ひとり

高 橋 みどり\*イギリス

「頑張る」と繰り返す子にパラソルをさしかけ闇をしばし分け合う  
母ひとり子ひとりの子を泣かせたる母なり我は「やばいポンコツ」  
馭西のキャバクラ「愛」の金網に絡みて咲ける朝顔の藍  
来し方にわたしの実り行く末にわたしの祈り 合歓の花咲く  
英語ならどう訳すかとこんな日に気にしてしまふ「御淋見舞おさびしみまい」

直文の生家

岩 淵 初 代 岩 手

真夜中にむくつと起きし弟が河原へ山羊を連れに走りき  
草を食む山羊を河原に繋ぎたる祖父のいませり七十年前  
赤松を目安に登る父母の墓畑に植ゑたる鶏頭供ふ  
直文の生家の池をめぐりたり高き梢のゆづり葉仰ぐ

ピザを焼く子に送らむとバジル摘む清しく匂ふ七月の畑

マイナカード

多 田 美慧子\*宮城

歌一首持参を帰省の土産とし家族歌会の開催を決む

通知来て二ヶ月放置迷い抜きマイナカードの更新済ます

いちばんの大仕事終うる心地にてマイナカードは何と重たし  
肩かけの買い物袋に犬を入れ汗びつしよりの男の歩く  
水瓶にみつしり張り付くボウフラに混じりて早きめたかのこども

つるばら

内 山 春 美\*千葉

茶を愛でし父母に供うる走り茶の針の緑はゆるりほどける  
三年みとせぶり会いたる友とのおしゃべりは過ぎし歳月巻き戻すよう  
二階屋を覆うつるばら滝のごと白き花びら飛沫と散りぬ  
南洋はロマンの宝庫とう医師はオウム貝の殻受付にかざる  
筋力の落ちたる脚をさすりつつ医師はダイブの魅力をかたる

月 白 の 馬

押 火 美奈子 千葉

夏の宵美しくまたたく牛飼ひ座のアークトルスは異名(麦屋)  
「ノンちゃん雲に乗る」にて麦屋をくれしは雲の上のおぢいさん  
白秋を読みすすむ昼 築地ついでわきに月白の馬ある気配する  
まだかしら 茗荷の群落に三日通ふ文月もはやなかば近づき  
「麗らかな忘却の朝」思ひ出す昔愛唱せし詩のかけられたち

小田部 雅子選

クーピーペンシル 磯貝恭子\*新潟

懐かしいクーピーペンシル机から出てきたけれどみんな折れてる  
全身の筋肉巧みに伸び縮みさせて蝸牛葉の上をゆく  
蝸牛は自分の殻を持ち上げて頭ふりふり前へと進む  
ラーメン店の使い込まれたビニール椅子のあいだに幾つか新しい椅子  
世界遺産の富岡製糸場の壁煉瓦の濃さは方位で違う

い い つ す よ 佐藤 彩 湖\*新潟

「い い つ す よ」と簡単に許可をくれたから野球部男子のボウズをさわる  
わたくしをナンパするの?と思いきやオープンカーの教え子だった  
O君は寺の跡取り文法も古文も読経の節で覚える  
咳一つすれば「先生大丈夫?」サッカー男子の優しいM君  
欠席の理由は父の法事だと告げるS君大人びて見ゆ

三 味 の 音 佐藤 多佳子 新潟

砂浜に雪が舞ふごと三味線の音が響けり養老院に  
びんびんと竊立つ波長の三味の音は我らを招く冬の荒波  
協奏の三味線の音が響き合ひ纏れ合ひまたひたりと止まる  
瞽女がゆく砂の浜辺をひたひたと支へんとして三味の音が追ふ  
集ひたる老人達の死の後も三味線の音は飢するかも

インクによるよろ 高橋 梨穂子\*新潟

チコちゃんが好き嫌いボーツと生きるの吐られるようなことじゃないから  
葉書一通郵便受けに落ちるように豪雨の最初の一滴が降る  
きみをまもる家の窓辺のペン先からインクによるよろわたしへ届く  
消毒液にふれてはじめて手のひらの無数の見えない傷がわかった  
おだやかとほんやりは似て雪のない校庭に雲はもたもた動く

鮮 明 な 赤 柴野 房 江 石川

白黒の映像ならばこれ程のショックは受けぬ 鮮明な赤  
点滴も入院まして車椅子初体験ぞ「粗板の鯉」

それぞれの業を曝して院内を同じバジャマで歩く人びと  
入院は二十四日でサヨウナラ。トマト卵の手料理? うまし  
短歌しかないと気付きて寝室にペンと紙置き吾を見極める

大野 英子選

薄荷色の日傘 柴田 有里\*愛知

薄荷色の日傘が作るまんまるの影を崩さず坂道あるく  
蓬生の葉裏の白が涼しげに見える真夏の空に雲なし  
へなへなの葉と蔓だらり朝顔の鉢にホースで夕立ちつくる  
友達鉢へと伸びた蔓と葉を解き持ち帰る夏休み前  
エアコンが止まると覚める睡眠は夏はお決まり恒例行事

テレビの隅っこ

小野 久美子\*兵庫 庫

おおらかに伸びるバキラに「ごめんね」と声かけながら剪定をする  
我が切りしバキラの先の小さな葉大きな葉っぱになりたかつたね  
猛暑日に天気予報士の指し示す日本列島ああ真っ赤  
テロップやワイプや字幕多すぎてテレビの画面は込みあっている  
ニュースまでワイプ表示はいらないと思えば目がゆくテレビの隅っこ

牧野博士の標本

高野 哲 司\*兵庫 庫

朝なさらなチシヤの朝露ながむればしやきつと養ふ観天望気  
起きあがりこぼしのごとく立ちあがるオニビシの茎たくまじきこと  
カラーバス効果の森を歩むこと牧野博士の標本を観る  
あかねさすムラサキツユクサ描写して文様を描く和更紗職人  
はつなつのトーンチャイムを鳴らすこと花穂の揺れるアゼナルコスケ

山崎洋子さん

原 田 登 美 兵庫 庫

ぽあんと白壁さびしき虚<sup>うつろ</sup>のあり修理に出したる時計のあとに  
猛暑来ぬ修理終へたる壁かけの時計はたらき蟬鳴きそめる  
どしやぶりの兆すゆふべの神戸港クレーンひとつが首かしげをり  
ふいに来ずけふの歌会に この世からふいに抜けたる山崎洋子さん  
まだラインつないだままよ山崎さんに佳作祝つた(〇先生賞)の

GODIVAの小箱

小 谷 優 香\*鳥 取

戦闘機の轟音の下に出会いたる島人<sup>しまいぬ</sup>だれも言葉のやさし

真夜深く妖しき色に導かれぼんやり眺めるストロベリームーン  
五時に起き女孫とパパは釣りデパート揃いのライフジャケットを着て  
出張の夫帰り来て手品のごと開く手の中GODIVAの小箱  
砂時計たよりに蒸らすダーズリン夫の好みの少し渋めに  
松尾 祥子選

多 死 社 会

江 崎 玲 子\*福岡

天空を白と黒とに二分して白き雨降る白雲の下  
玄冬に始まる人生青春も朱夏も過ぎゆき白秋を待つ  
積年の埃を払い往年のスピーカーより甦る音  
AIが作り出したる新人に仕事任せてさて何をせむ  
高齢化社会の後は多死社会多産社会はまだまだ遠い

ニイタカヤマノボレ

垣 野 幸 一\*長 崎

西海の橋ゆ見下ろす渦潮は逆巻きながら瀬を奔りゆく  
たまさかにきし西海の空かぎる無線塔あり歴史示して  
蟻どもがつくしん坊を仰ぐこと無線塔下の吾の小さし  
この塔ゆ「ニイタカヤマノボレ」が打電されむかし日米開戦されぬ  
渦潮の名所となりし針尾瀬戸きょうは潮満ち流れ穏やか  
つばめの子 松 本 道 代\*熊本

南阿蘇鉄道完全復活し一番列車待つ人ら明るき  
見上げれば小さな頭少し出て親の帰りを待つつばめの子

古木の梅実はならぬものと思いが鶉色の実が見えかくれする  
駐車場のすきまをうめる猫じやらし猫が遊ぶの見てないけれど  
高価なる買物だった補聴器は沈黙時が一番喧し

未知の世界 川越 三紀子\*宮崎

爆ぜるがごと車よりヤモリ飛び降りて未知の世界へ駆け出していく  
性別や生年月日メルアドと要求続き捕食されそう  
受話器から長々聞こゆる中国語事件の端に居たかもしれず  
終わらない世間話を切り裂いて団地の空を白鷺翔ける



立ち枯れの緋白歛の根元に吹いた芽を遂に見出でつ夏至の日の朝  
水 粥 福清 千美子\*鹿児島

わが孫が作りし大なるよもぎ餅ゲットウの葉をはみ出しており  
サトウキビ暑さに負けず元氣よし葉風スラスラ涼を分ける  
西浜の豆腐をもちて蔵さん宅訪ね水粥馳走になりぬ  
赤瓜をふくろいっぱい背に負いて大国主命みたい紀子姉さん  
炎天下右の手袋忘れ来てパイナップル植え右手日焼けす

風間 博夫選 「その二集」特選

じかん愉しむ 浜野 昌子 北海道

くれなゐのバラほころびて薫り立つ朝もやの庭一輪の紅  
鳥鳴く声聞くだけで去年の夏の頭蹴られし刹那がよぎる  
言の葉を胸に包みてあれこれと歌につなげるじかん愉しむ  
マスク付け教壇に立つ七月よ汗がポタリとテキストに落つ  
大根を煮ると思ふは母の味ゆずみそ夏の夕餉にのせる

セキレイの子 一成 田裕子\*青森

庭の隅小さな口をひし形に開けて親呼ぶセキレイの子ら  
セキレイの子のピイピイと声がして庭に小さなぬくもりがある  
じょうろ置く棚にセキレイ巢を作り親鳥枝から私を見張る  
近づけばとたんにピタリと口を閉じ枯れ草となるセキレイの子ら  
雨の日も親セキレイの声はして今日は取れたかひな鳥の餌は  
印鑑を押す 渋谷 美穂\*東京

首都高へ登りゆく我星くずの一つとなりて東へまわる

スプリーのノズルは私の衝動をやわらかくしてぶちまける部位  
枠内をいびつな丸で埋めぬよう三つ息吐き印鑑を押す

もの言わぬただそれだけで満足する上役の背を今日も見送る  
クーラーが造花の葉っぱを揺らすほど際立ってゆく退勤者の席

ネギ 刻む 富永 弘 東京

妻不在一年を経ぬ朝に夕に手をやいてゐる三度の食事

食べきれず捨てる日のあり旨さうな弁当見れば買ひてしまひて  
九州の水害ニュース聞きながらネギ刻むなりそば食ひたくて  
流木を支へきれずに大橋が音立て流れゆくさまを見き

白きバラ咲きたる鉢の草むしるペランダにふる雨のあがりて

翔平を観る 丸山 淳 子\*東京

捌の道しばし巡りて湧き水に喉をうるおす若葉もゆる日  
毛繕い怠ることなく老猫は続く猛暑に身をゆだねおり

庭に立つ細いのつぼの山法師滝のごと咲く陽の差す側に  
モンブランほうばりつつ観る大相撲フォークの先をテレビに向けて  
炎天下外に出るなど言われいて私はテレビで翔平を観る

大松 達知選

道の 駅 金子 英子\*新潟

陸奥の道を走りて一日に十五の道の駅を訪う

しちのへろくのへさんのへまでを巡り来てそれぞれ違う道の駅かな

家族への土産は磯焼はたて貝食べたいけれど家まで待とう  
二キロを三日で走った相棒の洗車に励むまた旅しよう  
孫からのリクエストだと友人がエレクトーン弾く曲は「アイドル」

Trust me. 平原 美佳\*静岡

ちよっとだけ世間知らずで勇敢な姫を連れ出す「Trust me.と  
世界地図広げてみたし君いずこアラジンのごと今日を旅する  
絵に描いたような富士山そこに居り正義はいつも動かないもの  
老眼鏡かけて卒アル覗き込み語る面影残る友らと  
学ランも白髪頭も麦わらも勝って校歌を歌う夏空

まるめています 岩 館 澄 江\*愛知

目が覚めて聞こえるはずのびよびよが聞こえなくって蟬がうるさい  
雑草に覆われながら黄と紅のダリアはとても下品に咲いた  
ブラシから愛犬の毛をむしりとりだいたいじにまるめています  
おたがいわかりあえないババママは犬をとおしてやりとりをする  
はつなつの緑の木々や風たちはやさしかったな変わっちゃったな

希 釈 小田 沙也加\*愛知

大学院志願理由書に記された言葉のどれも弱くて軽い  
三叉路で別れて久しい友人の足音ももう聞こえなくなる  
使い古された意義たち研究は信念で保たれる生き物

迷わないと言ったら嘘になるけれど迷っていないふりなら得意  
二年後の生き方のこと 諦めを覚悟に希釈して飲み込んだ

何かしている 大池 アザミ\*兵庫

家にある物はほとんど要らないが何も捨てないここにあるべし  
二重跳び音だけがする誰だろうスカートはいた女の子だな  
もうないか足りないものはなかったかイオンモールを何周もして  
両脇の歯科医と助手が目隠しのわたしの口に何かしている  
気にすれば体あちこちかゆくなる今まではなぜ平気だったか

原賀 櫻子選

廃線 吉方明 美\*広島

廃線を突き付けられた芸備線錆びたレールにカープ号映ゆ  
悠久の時を旅して聳え立ち下界憂える縄文の杉  
ぬか床の機嫌伺いかき混ぜるとれたてキユウリ一本足して  
ありがたい法話の席にカメモシは暈のへりで身じるぎもせず  
山肌を気遣い走る木次線豪雨の後のトロッコ列車

シーグラス 岡崎清和 香川

すみません、ありがたうを言ふボクが居るいつのまにいい人になったんたらう  
人生の終りは近いシーグラス波にもまれて角もとれたし  
ふるさとを離れて暮らす子らがゐて病めるベッドで彼らを想ふ  
病室のボクには時間たつぷりと余りて夜のとばりに捨てる

Lサイズでは合はぬパジャマをLに変へてほしいが 今日休日

視界 松岡綾子 香川

午前二時眼科トイレの向かひ棟今夜も灯る医大研究室  
「アタック25」のパネル開かぬ心地なり手術を了へて欠けたる視界は  
カーテンを隔てて見知らぬお隣と術後経過を言ひてなくさむ  
醬油袋切り口見えずしくじりて病室でたうぶ味なき小松菜  
看護師の声色心を映せるや聴覚研がる眼を病むわれは

猛者 秋山美江 愛媛

励ましも慰めもいらぬ荷を負ひて登りゆく身の一人が清し  
花園に猛鬘登山の苦を忘るクガイソウ・フウロ・ギボウシ・シモツケ  
辿り着く小屋に入れば猛者はかりスイカ出す人酒を出す人  
誰彼と登山談義に興ずるときふと身めぐりを飛ぶヒメボタル  
暗闇に登りくる灯の一つあり猛者の上にも猛者があるらし

やさしい光 小森田 より子\*熊本

どこからか赤兎泣く声聞こえくる四角いマンションまあるい響き  
無防備にあくびしながら散歩する妊婦のおなかにやさしい光  
よく通る路に空き地が出来ていて何が在ったか思い出せない  
朝七時れんらく網は行き渡りゴミステーションに鳥集合  
音もなく風に揺れおる風鈴のごとくに一個はじけた柘榴